国語文章論　概説
－ 意識の象（かたち）－

A Survey of Japanese Text Theory
－ Consciousness Form －

（2017年３月31日受理）

澁　谷　壽　郎
Hisao Shibuya

Key words：文章の定義，四原因説と三段論法（アリストテレス），係助詞「は」の「係の職能」，同値（変形）
トポロジカル相転移と意識の象（かたち）

抄　　録

アリストテレスの四原因説と三段論法を用い，新たに記述される文章の定義において，その論理的推論過程と判断過程に生ずる不一致（ずれ）に着目することによって，人間の意識体でもある文章という言語単位を，一つの「象（かたち）」として抽象帰納する。

は　じ　め　に

文法を論ずるとき，文の定義は必須であることは自明なことである。ところが語・文に，文章を一つの言語単位として研究対象に加えるべきだと提唱したのは1950年の時枝誠記氏「日本文法［１］」が最初である。また文章の成立は必ず文または文の連続体の成立を前提とするが，文または連文の成立は必ずしも文章の成立を保証しないという「全体は部分の総和ではない」文章という言語単位の特質は人間の思考判断や意識につながるものであり，その解決は言語学だけでは容易ではない。

本研究ではこれまでの文章研究の反省から，言語学だけではなく，理性の真理と称されるアリストテレス論理学（［２・３］）とトポロジー（位相幾何学［４・５］）の援用によって新たに文章を定義するとともに，更にそこから人の意識体としての「象（かたち）」を導くことができることを明らかにしたい。

１．文章定義の仮説

文の成立の問題を解明するのが文法研究であり，文章という言語単位を研究対象とするものではない。文の成立を追求しても，解決されるのは文法上の課題であって，決して文章という言語単位の問題解決にはならない。

文章の成立は必ず文または文の連続体の成立を前提とするが，文または連文の成立は必ずしも文章の成立を保証しない。全体は部分の総和ではない。

以上は時枝誠記が語・文・文章を言語における単位としてとらえ文章研究の必要性を説いてから現在に至るまで，文章は定義されなかった要因と考えられる。

ただ文章という言語単位を記述説明するためにはその基盤となる新たな文章定義を確立しなければ何も始まらないということでもある。

またそれぞれの言語の文法は個別的であるけれども，文章となると言語の個別性を越えて，普遍的に伝わるものがあるという事実がある。日本語と英語では文レベルの働きは異なるが，小説（映像化されたものを含む）など，いわゆる文章的媒体を介することによって，テーマ

やモチーフといったものを我々は認識して共有することができるのである。

文章がいわゆる人間の思考判断や意識というものと深く関わっている，文章は一つの意識体として捉えられるということでもある。よって，文章という言語単位を定義する過程では言語学だけではなく，論理学，数学など人間の思考判断に深くかかわる他領域の援用の必要があるということになる。

文章の形態は「説明的文章・小説」の散文的文章と「詩・短歌・俳句」の韻文的文章に大きく分けることができる。また散文的文章には「段落」，詩には「連」或いは「行」，短歌には「五/七/五/七/七」の「句」など，その文章形態に特有の言語単位から成り立っている。それらを本研究では「構成的言語単位」と総称する。

この構成的言語単位相互の関係からその文章形態ごとに文章構造というもの，例えば説明的文章などで頭括型・尾括型・双括型などと分類する方法もあるが，文章という言語単位を統一的に説明することを目指す本研究においてはその必要性は感じない。

そもそも段落などの構成的言語単位は書き手によって任意に措定されるものであって，文章という言語単位を統一的に記述するには不都合である。短歌を例にとれば，「五七五」を上の句，「七七」を下の句のように文章は二つの言語的成分から成り立っていることは短歌という文章にとっては自明な構造である。

つまり短歌では上の句が「自問成分」，下の句が「自答成分」に当たり，その間には「問答関係」が成り立っていると理解される。小説の場合は少し特殊だが，結局すべての文章形態はこの『自問成分 ＜問答関係＞ 自答成分』という一つの文章構造に帰納されるという指摘は本研究が初めてであろう。

すべての文章形態において文章構造は一律であるという立場に立つならば，文章という言語単位が「書き手の内面の書き手に対する自問自答を文字表記した言語単位である」という定義が導き出されるのではないかと考える。また文章が書き手の内面の書き手に対する自問自答であるならば，文章が人間の思考判断・意識と深い関係を持つことも容易に推測されるのである。

2．四原因説と文章定義

文章という言語単位を定義する過程では言語学だけではなく，論理学，数学など人間の思考判断にかかわる他領域の援用が必要であることは既に述べたが，本研究では近代論理学を築き，コンピュータ・プログラミングのパラダイムを構築する際にも活用されているアリストテレスの四原因説（しげんいんせつ）に従って文章の本質を定義することを試みる。

アリストテレスは「もの」の本質，「もの」が存在するためには「形相因」「質料因」「目的因」「始動因」の４つの原因があるとした。「文章とは何か」という問いに，文章が文章であるところのそのもの，つまり「書き手の内面の書き手に対する自問自答が記述されたもの」という形相因，「記述は文と文とのつながり（連文）による」という質料因。また「作中人物を中心に展開する」という始動因，最終的には人間の意識によって「記述され，まとめられた事柄の内容，すなわち要旨」が目的因として，まず導かれることになる。

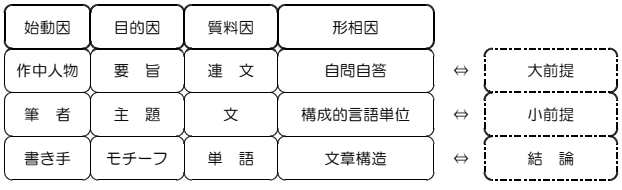
またアリストテレスの四原因説には四つのそれぞれの原因にはさらにその原因というようにさかのぼることができる「原因連鎖」という考え方がある。ただその連鎖は無限ではなく，必ず最終的に整理されれば，三段階となる。その三段階でまとめられたものは「大前提➤小前提➤結論」という定言的三段論法の論理的推論型式と一致する。

以上の四原因と原因連鎖に従えば，文章形態・文章構造・自問自答・作中人物「私」（小説の場合は主人公）・筆者・書き手・要旨（教育現場では説明的文章に限定で用いられることが多いが，本研究では「すべての文章形態における記述された事柄の内容」という意味で用いる）・主題・モチーフ・単語・文・連文・文章などの文章を記述説明する上で必要となる術語概念が機能的に整理されるのである。以上を図１としてまとめる。

図１　四原因説に基づく「文章定義」

論述の結果として，三つの階層から成る相転移的な定義となったが，これが文章の新しい定義の全体構造である。またこの文章定義は前述したように「大前提➤小前提➤結論」という論理学における定言的三段論法の論理的推論の型式と図２のように一致する。

図２　四原因説に基づく「文章定義」と定言的三段論法



３．三段論法と判断

日本語における典型的な判断形式は「ＡはＢである。」という言い方であるが，まず「は」が多くの文法論において，格助詞として付属語に分類されることについて考察したい。

格助詞の「格」とは文の中で他の語に対して持つ関係概念のことであるが，日本語では名詞などは格を持たず，助詞が附属することによって格が示される。

つまり助詞には他の語に対しての関係概念は持つが，「時計」なら「時計トイウモノ」のような素材概念は表示しないということである。

だが，その助詞の中にも次元の異なるものがあることは「国語文法論［６］/国語構文論（渡辺実）［７］」で既に指摘されている。（本研究で構文論という場合は渡辺実博士の「国語構文論」を指す。）

副助詞と係助詞「は」と呼ばれる助詞である。

「靴下をもはかせる。」という文が描き上げる一つの事柄の内容である「靴下をはかせるトイウコト」という叙述内容に，例えば「靴下を寒かろうと思いはかせるトイウコト」のように，副助詞の場合は情意的な意義となることが多いが，素材概念に匹敵する意義を叙述内容に累加しているのである。以上を「副の職能」と呼ぶならば，副の職能という関係概念から素材概念を，それぞれの文脈上で形成されているということになる。関係概念だけで素材表示を持たない，いわゆる一般的な助詞の働きとは異なっているのである。

係助詞「は」と呼ばれる助詞「は」は「どのような関係概念」から「いかなる素材概念」を表示するのか新たな考察が必要とされる。係助詞「は」は英語のbe動詞と同様に「ＡはＢである」という型式の典型的判断文において用いられる助詞であるが，そもそも「判断」というものについての考察は言語学に論理学の援用が必要となる。

アリストテレスの創めた論理学は四原因説から導かれた三段論法は二つの前提命題から一つの結論命題を得る推論であり，基本的には自然言語の論理に拠る。ただ三段論法はその前提の性格により「定言的判断・仮言的判断・選言的判断」と三つに分類され，さらに命題と命題との関係（項と項の結合）には「全称肯定判断・全称否定判断・特称肯定判断・特称否定判断」の４種類があり，それらの組み合わせから２５６通りの型式が考えられる。その中から正しい型式を抜き出すことが伝統的論理学の主要な任務となっていた。ただ現代では２４通りが妥当な三段論法とされている。アリストテレスによって定式化され，知の至宝とも呼ばれる究極の推論である三段論法は「命題」「対偶」「判断」という三つの観点から検証されることにより，初めてその意義が示されるものと考える。その論述は避けて通れないものであるが，今回は日本語における「ＡはＢである」という型式の典型的判断と定言的判断の三段論法のなかで，「判断」という観点から三段論法を論証することにする。

三段論法では大前提，小前提および結論という三つの命題において，結論が真であるためには前提が真であること，および論理の法則が守られていることが必要となるが，以上は「判断」という観点からは三段論法は大前提から特称肯定判断によって小前提が，小前提から次の特称肯定判断によって結論が導かれることで，全称肯定

判断によって大前提が真であることが確かめられるという判断過程を表している。

つまり論理的推論過程と判断過程には不一致（ズレ）が生ずるのである。（表１）

表１　論理的推論過程と判断過程の不一致

（全称肯定判断）
大前提：すべての人間は死すべきものである。
↓（特称肯定判断）
小前提：アリストテレスは人間である。
↓（特称肯定判断）
結　論：ゆえにアリストテレスは死すべきものである。

表１で示した判断過程をさらに詳細に検討すれば，大前提から小前提を導く特称肯定判断とは限定判断のことであり，限定判断という関係概念から導き出される限定的判断内容とは「限定されたコト（「こと」の世界）」となろう。

次に小前提から結論を導く特称肯定判断とは特定判断のことであり，特定判断という関係概念から導き出される特定的判断内容とは「特定されたモノ（「もの」の世界）」となる。記号の集積である「ことばの世界」が「ことの世界」，「ものの世界」へと意義体として相転移［ある物質の，どの部分をとってもその物理的，科学的性質が等しいのに，ある状態（相）から他の状態（相）へと変化（転移）すること。水（液相）が氷（固相），水蒸気（気相）など。物理学の術語。］する過程は人の意識の生成過程と対応する。

さらに限定判断と特定判断という特称肯定判断は最終的には「ゆえにアリストテレスは死すべきものである（真）」ならば「すべての人間は死すべきものである（真）」という全称肯定判断として帰納されるということになる。この全称肯定判断とは言語学で言うところの陳述判断であり，陳述判断という関係概念から導かれる陳述的判断内容とは文章論上でいう「モチーフ」，人の「意識」ということになる。

［山田孝雄［８］によって一般化した術語である陳述には判断によって叙述される内容が述語で統一される，形としては存在しないが用言を伴うとして仮定したものにその働きがあるなど様々な説があるが，本論は国語構文論（渡辺実）における「書き手の判断を伴い，文における根本の働きである読み手への呼びかけ」という機能で総称された陳述（の職能）という術語を用いる。］

ところで，限定判断と特定判断との関係は事物または表象から，ある要素や性質や側面から必要十分条件を基準に選び出すことを抽象ということと，またある要素や性質や側面から必要十分条件に照らして切り捨てられることを捨象ということと同じ関係である。

言い換えれば，取り出された性質に着目すれば抽象であり，捨てられた性質に着目すれば捨象ということになる。結局，抽象と捨象は「必要十分条件」という基準から得られた部分表象を別の視点から表した等価的判断概念であるということになる。

以上から「は」の関係概念として共通して導かれるものは「同値」という関係概念ということになる。ただし，論理学でいうところの「全称と特称」とは判断の観点からすれば，その同値変形のスタイルが異なるという点には留意すべきであろう。

「ＡはＢである。」という最も典型的な判断文形式による場合，「Ａ」にくる表現を「主辞（主概念）」，「Ｂ」にくる表現を，「賓辞（賓概念）」として，「は」を繋辞とするが，その「繋辞」とは一律に「同値」という関係概念を示す。その同値という関係概念から限定的判断内容，特定的判断内容，陳述的判断内容という三つの判断内容という素材が表示され導かれるということである。

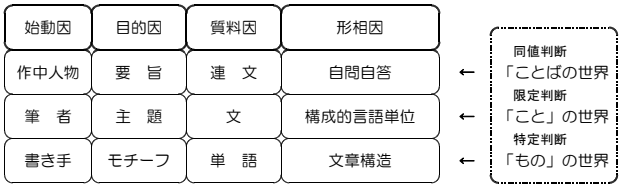
「ＡはＢである。」という最も典型的な判断文形式は「Ａ」にくる表現を「主辞（主概念）」，「Ｂ」にくる表現を「賓辞（賓概念）」として，繋辞「は」の同値的関係構成概念から限定的判断内容，特定的判断内容，陳述的判断内容という素材を表示する。

同値的関係構成から判断内容を導く「は」という助詞は「陳述に直接かかわる」意味から他の助詞とは区別し，副助詞の副の職能に対して『係（かかり）助詞「は」』の「係の職能」

と別格に呼称することで，構文論体系にも位置付けられると考える。（表２および図３）

表２　係助詞「は」の係の職能の関係構成の職能と素材表示の職能

図３　「文章定義」と「判断過程」



４．トポロジカル相転移と意識の象（かたち）

判断過程と四原因説に従うと，文章の定義は段階的，連続的に変形しているが，最終的には第一層目の定義に戻ってしまうことになる。このことは数学・物理理論としての「連続的に変形させても変わらない性質（トポロジー）」による物質の相転移を解明した「トポロジカル相転移」の理論を応用すれば二次元的文章定義から三次元的に人間の意識として抽出することができると考える。つまり限定判断，特定判断，陳述判断をトポロジー的に「ねじれ」，三段階三層の原因連鎖を相転移と捉えれば，まず二次元的文章定義は図４のようになる。

図４　二次元的文章定義

さらに結び目（陳述点）が命題という観点からは三段論法でいうところの大前提，判断という観点からは係助詞「は」の陳述判断を表すことに対応するため，「文章とは書き手の内面の書き手に対する自問自答を文字表記した言語単位である」のように言語学的に文章定義が簡潔に示されると同時に，トポロジー的には文章は「書き手の内面の書き手に対する自問自答によって閉じられる」ということになる。

以上から，この二次元的文章定義を三次元的文章定義，すなわち文章を一つの象（かたち）としてとらえることが図５のように可能となる。

図５　意識の象（かたち）（三次元的文章定義）

一般的には半ひねり（ねじれ）が１回だけ入れたものを数学者アウグスト・フェルディナント・メビウスが到達したメビウスの輪というが，３回の奇数回の半ひねり（ねじれ）を入れた輪もメビウスの輪と同相である。全体は３回のねじれを頂点とする三角形のような概観となる。以上，本研究で論証した文章の定義から人間の意識の象までを導くことができる。

５．今後の研究について

文章という言語単位の新しい定義から最終的には「意識の象（かたち）」として三次元的にも示すことができたことで，今後は個人的な立場が変化しても「説明的文章」「小説」「詩・短歌・俳句」それぞれの文章形態を本研究での「文章とは書き手の内面の書き手への自問自答である」という文章定義にしたがって，判断・命題・対偶の三つの観点から統一的に論証したいと考えている。

［主な参考文献］

［１］日本文法　口語篇〈岩波全書　1950年〉時枝誠記
［２］アリストテレス形而上学上・下〈岩波文庫　1959・1961年〉出　隆(訳)

［３］アリストテレス入門〈ちくま書房　2001年〉山口
義久
［４］トポロジー：柔らかい幾何学〈日本評論社　2003
年〉瀬山一郎
［５］トポロジー〈岩波全書276　1972年〉田村一郎
［６］国語文法論〈笠間書院　1974年〉渡辺　実
［７］国語構文論〈笠間書院　1946年〉渡辺　実
［８］山田孝雄〈近代浪漫派文庫　2006年〉新村　出

〈その他参照文献〉

もの・こと・ことば〈勁草書房　1979年〉廣松　渉
国語連文論〈和泉書院　1984年〉長田久男